

# 扇や通信 '13 春号

大震災からはや2年が経ちました。まだ、多くの町や村から災害の爪痕が消えず、沢山の方々が不安や不自由に耐えて、仮のくらしを営んでおられます。あらためてお見舞い申し上げます。

こんな時にも、春は変わることなく巡ってきました。安達太良高原はきらめく光の粒子で覆われ、木の芽が萌え、花が咲き、鳥と風が歌い：厳しい冬と打って変わったやさしさと、訪れる者を包み込んでくれます。

こんな季節の、雨上がりに現れる虹の美しいことー子供の頃に、あの虹の足まで行ってみたいと思った人も、少なくないでしょう。

今回は、本当にあの虹の足まで行った女の子のお話をお届けします。

女将

明治維新の大嵐が吹き荒れて、二本松城が落ち、岳温泉も焼かれてしまった時代がありました。このお話は、その後、岳温泉が新しく生まれ変わって、また昔のように、沢山の湯治客でにぎわった頃のものです。

旅館ふじやは、小さいながら人情味のあるていねいなもてなしで、たいそう繁盛しておりました。ふじやの主夫婦のたった一つの悩みは、生まれてくる子が娘ばかり四人で、跡取りの男の子がないことでした。その末娘・あやのは六歳になったばかり。姉たちは、刺繍とか、着せ替え人形とか、お

いる、と両親も宿の者もみんな安心して、あやのの思うように遊ばせておきました。

そんなあやのが一番好きなのは、虹。雨が上がった後、遠い山から山に、時には高原の向こうに、美しい弧を描いて現れる虹の美しさ、不思議さに、あやのはいつだってそれを忘れて見入ってしまうのでした。虹が出ると、あやのは外にかけだしていったまま、虹が消えるまで戻ってこないの、姉たちはあやのを「虹っ子」と呼んでからかいました。

あやのの秘かな願いは、虹の足に行ってみることです。虹が出るたび、

## 虹の足に行っただ子のおはなし

手玉、おはじきなど、女の子らしい遊びをしているのに、あやのだけは、山や野原を駆け回ってひとり遊びの好きな子で、家族からも宿で働く者からも、「変わった娘」といわれていました。

あやのは、木々をゆるがせて風が渡って行くさまや、林や野原に咲く花、色々な鳥、時々出会うタヌキやキツネ、野ウサギ、山の中にこんこんと湧き出る清水などを見るのが好きでした。あやのの姿が宿のまわりに見える時は、どこかの山が野原に出かけて



あやのは、その足をめがけて歩いていきます。もたもたしていると、虹は消えてしまうので、全力で走ることもありません。そうやって山道や野原を追いかけると、虹の足はあやのが一歩近くと一歩遠のいて、そのうち空にとけこんで見えなくなってしまう。

「どうしたら虹の足に行けるんだべ」と、あやのは両親や姉たち、宿の者にたずねてみましたが、誰もみんな「そんなことはできないよ」とそっけない返事ばかりです。

宿には、あやのが生まれるずっと前から働いているご飯炊きのおばあさんがおりました。あやのは、雨降りを外に出られない日は、いつもおばあさんが炊事をするかまどの前でいろいろな昔話を聞いたり、山歩きの知恵をさずけてもらったりするのでした。あやのは、そのおばあさんにも、何度となく虹の足に行く相談を持ちかけましたが、そればかりは、おばあさんにも答えが出ませんでした。

たった一つ、はっきり教えられたのは、「虹の足まで行った者は誰もいない」ということです。「んでも、おらの小さい頃も、虹の足に行ってみてえなあ、って思ったもんだよ。おらも何回もためしてみだが、だめだった」と、おばあさんは笑いました。

できないといわれればいわれるほど、あやのは、ぜったいに虹の足に行ってみるんだ、といっそう強く心にきめるのでした。

## ほくろの印

「やがて春が来て、あやのに弟が生まれました。宿中が「跡継ぎが生まれた」と大喜びで、前々から父親が男の子のために用意していた「新吉」という名前が、神棚に貼り出され、家の中は新しい光が射しこんだように明るくなりました。あやのも、生まれたばかりの弟の枕元を動かさず、かわいい顔をながめてはにこにこして、弟が大きくなったら、今度は二人で虹の足に行ってみよう、と思いました。

ところが、赤ちゃんは生まれてたったの六日で、淡雪が消えるように亡くなってしまったのです。父親も母親も、子供たちも、宿の者もみんな嘆き悲しみました。新吉のお七夜のためにお祝いは、悲しいお葬式になってしまったのです。

家中がばたばたとお葬式の用意で忙しくしている時に、あやのは、御仏間に寝せられた弟のそばに、じっと座っていました。

小さな顔にかけられた白い布をそっとめくってみると、弟は安らかな、愛らしい顔で、まるでやすやすと眠っているようでした。そんな弟をみているうちに、あやのは、ふと、思い出したことがあります。

「ご飯炊きのおばあちゃんと、かまどの前で話をしていた時、薪をくべようと腕を伸ばしたおばあちゃんの腕の首に、大きなほくろがあるのに気が付

いたのです。「こんなところにほくろがあるんだね」とあやのがいうと、おばあちゃんにはこっと笑って、「昔の人は、家族が死ぬと、また生まれ変わって来た時の目印に、つって体のどこかに墨でほくろ付けてやっただよ。おらは、十一で亡くなったキヨッ



つう伯母に付けてやったとおなじ場所、おなじ形のほくろがあるもので、ばあさまのじいさまに『キヨの生まれ変わりだ』ってよくいわれたもんだあ』といったけ…。

あやのは大急ぎで帳場に行き、たつぷり墨を含ませた筆を持って来ました。そして弟のきもの袖をまくりあげて、左腕の内側にほくろを描こうと筆を付けたとたん、「あやの！何してるんだ、こっちゃん来て手伝え！」と姉たちが呼ぶ声がありました。あやのがぎくっ、としたとたん、筆がいっしょにぎくっ曲がってしまい、まあるい

かわいいほくろのつもりが、大きくてゆがんだ、すいかの種のような形のほくろになってしまいました。

「ま、いいか…」あやのはちよっぴり胸が痛みましたが、弟の耳元に「また生まれ変わってくるんだよ、待ってるからね」とささやいて、御仏間を出ました。

## 虹の足に着く

それから三年の歳月が過ぎて、父親も母親もようやく、新吉を失った悲しみから立ち直り、あやのも九歳になりました。

あやのは相変わらず虹が大好きで、「いつかきつと、虹の足に行く」という秘かな願いはゆるぎませんでした。九歳にもなると、脚もすっかりできて、あやのの野山を歩く距離はずいぶん伸びましたが、どんなに遠くまで追いかけても、虹の足はやっぱり、近づいただけ逃げていくばかりでした。

ある雨上がりの日のこと。いつものように、あやのが虹の足を追って山道を上っていると、藪の中からキューン、キューンと動物のなやら切羽づまった泣き声が聞こえてきます。藪をかきわけて近づいてみると、子ギツネが倒木の間にはさまってもがいていて、母ギツネが必死で子を救い出そうとしていました。あやのは、渾身の力で腐った木をようやく少し持ち上げると、子ギツネはするり、と抜け出して、母親のそばによたよた歩いていきまし

た。「ああ、よかったねえ」あやのが汗だくになった顔をふきながら見送ると、親子はふり振り返り振り返り、山の奥に入って行きました。その日もあやのは、虹の足にはたどりつけませんでした。

ある夜、春の嵐が一晩中吹き荒れて、烈しい雨が降り続けました。でも翌朝は、そんなことがウソだったように晴れわたり、岳の西の天空に大きな、とびきり美しい虹がかかりました。あやのはもつ、じっとしていられます。「おや、また虹の足かい？」と姉たちからかわれながら、あやのはまた、山道を上って行きました。でもいつものように、虹はあやのが進めば進むほど遠くに逃げていきます。どうか消えないで、と心の中で叫びながらあやのは進みましたが、もつ、脚が痛くてたまりません。「やっぱりだめか…」と思った時、ギツネの親子がひらりと



目の前に現れました。「あ、このあいだのキツネだね！」あやのが声をかけると、キツネの親子は、あやのを誘うように、ふり返りながら藪の中に入っていきます。ふしぎに思いながらついていくと、キツネがぴたりと足を止めたところに、小さな穴があります。キツネたちはその中に入って行きました。あやのが穴の前で迷っているとき、子ギツネが戻って来て、こっち、と

ていきました。

そして、突然、頭の上がぱあっと明るくなりました。どうやら穴の出口にきたらしいのですが、その明るさといったら、もう、目をあけていられないほんです。びっくりしながら這い出たあやのは、もっとびっくりしてその場に座り込んでしまいました。



うぶうにあやの顔を見ます。

あやのは勇気を出して、その穴に入りました。穴は、子供がやっと動けるほど狭くて、真っ暗で、どこまでも続いているようでした。そこを這っているうち、あやのは恐ろしくなって引き返そうとしましたが、キツネが何度もそばに戻って来て、がんばれ、というようにあやのの頬をなめるのでした。あやのは涙目になって暗闇の中を這っ

そこは、輝く虹色の、大きな大きな柱が何本も建ち、虹色の雲が一面に広がっている、美しい広間でした。

あんぐり口をあけてあたりを見回しているあやのの頭の上で、やさしい声が響きました。「うとうと来ましたね。ここは虹の足ですよ」一見上げると、薄い虹色の衣を着て、長い髪も虹色の、美しい女の人が、あやのにはほほ笑みかけています。「ここが虹の足だ、

虹の足に来たんだ！とあやのは感激でしばらく呆然としていました。

「ちく、ここに来れましたね。これまで虹の足に来た者はひとりもないのに…。一心に願えば、その思いはかなうものですよ」女の人はそういってあやのの髪をそっとなでました。

### 生れ変わりを待つ子供たち

やっとわれに返って、あやのがあたりを見回すと、子供たちがいつぱい、雲の上で楽しそうに遊んでいます。みんな透きとおる虹色の衣を着て、きらきら光る目と笑顔がうつくしい子供ばかりです。赤ちゃんもいれば、よちよち歩きの子、三つ四つの子、盛りの子、小さい子たちのめんどろを見ている、六つ七つぐらいの子、みんなのさざめきがきれいな音楽のように聞こえてきます。

「あの子たちは、いったん人間の世を去った子たちです。そしてまた、生まれ変わろうとしているのですよ」と女の人はいいました。「いつ、どこの、どんな父と母のもとに生まれるか、私がせわをしてやるのです。本人が行きたいところがあれば、その望みを叶えてやるし、まだ小さくてわからない時は、私が、どこの子になるか、決めてやります。時々、空の上から、沢山の家や人や町や村を見て、生まれ変わって行く子供がしあわせになれるかどうか、調べているのです」

「どうやって調べるんですか？」

あやのがふしぎに思ってたずねると、女の人はにこっと笑って、「虹の橋の端から端まで歩いて、下の世界を見ているのです。いつも私を見てくれる、おまえのことも、私は見ているですよ」と女の人はいいました。

「あの子たちのところにいつてごらん」といわれて、あやのがおすおす雲の中を進むと、子供たちはみんな、にこにこ笑いかけてきます。手を振ってくれる子やあやののきもの裾を引っ張っていたずらする子もいます。

その中に雲のふんわりしたふとんに眠っている赤ん坊がありました。透きとおった衣から小さな腕が出ています。あやのは「おやおや、ねぞうの悪いこと。かせひくよ」と、赤ん坊の腕をふとんに入れてやろうとした時、腕の内側にすいかの種のような大きなほくろをみつけました。「これは弟の新吉だ」とあやのは気づきました。「新吉、きつとまた、家の子になって帰ってくるんだよ」あやのは赤ん坊の耳元にそうささやいて、桜色のほっぺをそっとなでました。

少しはなれたところに、年かさの子供たち十五、六人が輪になって座って、楽しそうになにかを語り合っています。「あの子供たちは…？」とあやのが聞くと、女の人はいいました。「あれは、官軍に攻められて二本松のお城が落ちた時、戦って死んだ子供たちです。その子たちが、生まれ変わる

なら、みんな一緒に、また二本松に生まれて行きたい、と願っているのです。私もそうしてやりたくて、いい親を探してききましたが、なかなかみんな同じ時に、という願いがかなえられなくて、とうとう、今になってしまったのです。でも大丈夫。それぞれ、いい親を見つけてあげましたから」ー女の人はそういって、輪になった子供たちをやさしい目でながめました。

## 帰って来た弟

あやのは、冷たいしずくが顔に当たって、気がつきました。あたりは真っ暗で、自分がいったいどこにいるのかわかりません。木々がざわざわ音を立てて、何かに驚いた鳥が鋭く鳴く声で、森の中にあることがようやくわかりました。でも、どうやって帰り道をさがせばいいのか見当もつきません。あやのは心細くてぼろぼろ涙をこぼしながらうずくまっています。

どのくらい時がたったのか、ふと気付くと、暗闇の奥から大勢の人の声が響いて来ます。あやのが顔を上げると、黒い木立の間からちらちらと明かりが動きながら近づいてきます。「あやのーっ!」「あやのーっ!」「口々に叫ぶ声が出て、あやのは思わずわあーっと大声で泣きました。「おーっ、いたぞっ!」藪をかきわけて転がるように近づいてきたのは父親でした。「ああ、助かった…」その場に座り込んだのは母親でした。宿の者も、提燈を高く上

げてそろそろ集まって来ました。父はあやのをおんぶして山を下りました。「はあ、一度と虹の足なんか追っかけた山に来るんじゃないぞ」という父の背中、あやのは疲れ果てて泥のように眠ってしまいました。

あやのは、三日も眠り続けてやっと元気をとりもどしました。「わたし、虹の足にいつてきたんだ」と、あやのはみんなにいいましたが、誰も笑ってとりあいません。山で迷子になって頭



がヘンになったのではないかと母親は心配しました。でも、ご飯炊きのおばあちゃんだけは、「そうがい、いがあったない。あんだはたいしたもんだ…」といいました。「あんだの頭のとっぺんが、ほら、うっすら虹の色に染まっているもの…ほんとに虹の足に行ってきたんだない。」

―それから夏が来て秋が来て、冬が過ぎて…岳の山々に真っ白いこぶしの花

が咲く頃、あやのに弟が生まれました。「なんだって元気な赤ん坊だぞ!」とお産婆さんがびっくりするほど、大きな産声をあげて生まれた男の子に、産湯をつかわせていたお産婆さんは、「あれ、この子はこんなとこに、変わったほころがあるよ」と笑いました。父も、姉たちもたらいをのぞき込んで笑いました。あやのも姉たちの間に割り込んでみると、赤ん坊の左の腕に、すいかの種の形のほころがしっかりと付いていました。「新吉、帰ってきたんだね」あやのは心の中でいいました。

赤ん坊は「健吉」と名付けられて、すくすく大きくなりました。あやのはそれから、ぷつぷつ、虹の足を追いかけるのをやめました。両親も周りの者もあやの森の中の迷子がたえたのだらう、と安心しましたが、みなふしぎがったのは、虹が出る度に、あやのが今度は虹に手を合わせることでした。ご飯炊きのおばあちゃんだけが、あやののそんな姿をほほ笑んで見守っておりました。

それからまた、長い歳月が流れても、岳の天空には変わらぬ美しい虹の姿を現します。虹の足に行ってみたくてと思う子供たち、いいえ、大人もーの夢を七色の光の中に集めて、いよいよ輝きを増しながら…。岳の森を歩いていて、やぶの中に、もし、小さなほら穴が見つかったら、それは虹の足への入口かもしれません。いや、キツネが

タヌキの巣穴かもしれません。どちらにしても、のぞいてみるだけで、中にはお入りにならないよう、ご注意ください。上げます。



## 扇や。ペア宿泊券をどうぞ

●大切な方、親しい方へのあったかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券(お二人で一泊三万円)はいかがでしょう。

岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館



扇や

あだたらの宿

福島県二本松市岳温泉1-3  
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004